

氏名	蔡 嘉昱
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 10187 号
学位授与年月日	令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	副詞的用法を持つ漢語の中日対照研究 ― 疊語形漢語を中心に―

主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	矢澤 真人
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	橋本 修
副査	筑波大学 助教	博士（言語学）	田川 拓海
副査	文教大学 教授	博士（言語学）	蔣 垂東

論文の要旨

本論文は、「点々」「茫々」「少々」「多々」など、日本語で副詞的用法を持つ疊語形漢語を中心に、日中両言語における意味・用法の差違と変遷過程について考察するとともに、日中両言語の副詞的修飾表現の枠組みについて考察したものである。

本論文は、以下の9章によって構成される。

第一章 序章

第二章 先行研究と本論文の位置づけ

第三章 情態を表す疊語形漢語について―「点々」「茫々」を例に―

第四章 存在のあり方を表す連用修飾表現について

第五章 情態を表す疊語形漢語の意味変化―「点々」を例に―

第六章 情態を表す疊語形漢語の意味変化―「茫々」を例に―

第七章 数量を表す疊語形漢語について―「少々」「多々」を中心に―

第八章 数量を表す疊語形漢語の意味変化について

第九章 終章

まず、序章では、漢語副詞の漢語受容史研究における重要性と、体系的に日中両言語の相違を捉える先行研究が少ないこと、本論文で疊語形漢語に注目する理由とが示される。その上で、現代日本語と古典中国語双方において副詞的用法を持つ疊語形漢語を取り上げ、共時的視点と通時的視点から、日中両言語の副詞的修飾表現の相違と、その相違が生じる過程について検討する、という目的が示される。

第二章では、前田富祺や鳴海伸一、劉玲など、漢語副詞の日本語への受容に関わる研究、朱德熙、张国宪、鈴木重幸など、日中両言語における形容詞と副詞の連続性に関する研究、郑贵友、新川正、矢澤真人、仁田義雄など、日中両言語の副詞的修飾表現に関する研究について紹介と批判的検討がなされた上で、本論文では、漢語副詞の日本語への受容状況に関する検討、形容詞と副詞の関連性に関する中日対照、副詞的修飾表現の枠組みの中日対照という三つの課題に取り組むことが示される。さらに、本論文で用いる用語の検討がなされる。

第三章では、「点々」と「茫々」を例に、中日の情態を表す疊語形副詞の対比が行われる。まず、『現代日本

語書き言葉均衡コーパス』『北京大学漢語語言学研究中心現代漢語語料庫』を利用し、現代中日両言語における「点々」「茫々」の意味用法を調査した結果、「茫々」が状態を表すのに対し、「点々」は「存在のあり方」を表すと捉えるのが良いこと、日本語では両語とも副詞的修飾表現に用いるが、中国語では形容詞的修飾として多用されるという相違があることが指摘され、日本語における連用修飾表現は、中国語より制限が少ないという仮説が示される。

第四章では、第三章で提案した、日本語における「存在のあり方」の副詞的修飾表現について検討がなされる。まず、先行研究の副詞的修飾表現の素性分析からも「存在のあり方」のタイプは規定されないこと、空間属性を表す副詞的修飾表現とも異なることが示される。「存在のあり方」は、「対象であるもの同士の位置関係、すなわち、空間での占め方を表す」と定義される「事物の内的属性ではなく、外的属性」の表現だとして、日本語の副詞的修飾表現に新たな枠組みを設けることが提案される。さらに、存在位置を表す結果表現や空間規定的な状況成分との違い、いわゆる存在様態との関わりについて検討した後に、中日両言語において「存在のあり方」がどのように表現されるかに関する実態調査が行われる。この結果、日本語では動きと関わる場合にも関わらない場合にも副詞的用法で出しやすいのに対し、中国語では、動きと関わる場合は副詞的用法となり、動きと関わらない場合は形容詞的用法となることが明らかにされる。

第五章と第六章では、「点々」と「茫々」のそれぞれの意味・用法に関して、通時的観点から検討がなされる。中国語に関しては、春秋時代から近代までの資料、日本語に関しては、上古から近世までの資料によって、両語の使用の変遷が調査された結果、日本語では、両語とも近代から急速に和語化が進み、副詞的用法が多くなること、中国語では、動きと関係しない状態を表す用法が衰退していく傾向があることが明らかにされる。

第七章では、「少々」「多々」の中日両言語の対照が行われる。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『北京大学漢語語言学研究中心現代漢語語料庫』を用いて調査した結果、日本語では「少々」が数量にも程度にも多用されるのに対し、中国語では「少々」は使用しにくいこと、日本語では「多々」は数量のみ表すのに対し、中国語では数量と程度を表せることなど、用法上の違いがあることが示される。また、中国語においては、実現量・不定量の場合のみ副詞的用法が可能であるのに対し、日本語ではそのような制約がないといった新たな言語事実の提示もなされている。

第八章では、「少々」「多々」の用法の通時的変遷について論じられる。第五章・第六章と同様の範囲の調査から、中国語においては確定量を表す用法が衰退していく一方、日本語においてはこの用法が維持されていることが実証的に示される。

第九章では、これまでの内容が総括されるとともに、残された課題と今後の展望が示される。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、著者の広範囲な専門知識と優れた研究能力とがあって、なしえたものである。中日両言語の資料を広く調査する力、日中の古典語から現代語までを解釈する力、大量の用例から適切な用例を見いだす力、それらを理論的に組み立てる力のいずれかが欠けていても本論文は成立しない。

本論文には、大きく分けると、副詞的修飾表現の方面に関する寄与と、日本語における漢語副詞受容の方面に関する寄与との二つが考えられる。

前者は、日本語と中国語の副詞的修飾表現の枠組みの違いを、形容詞的修飾表現との関わりから論じ、その相違に動性や確定量が関わることを示した点である。しばしば、単純に両言語の副詞を対比するという方

法が取られることもあるが、言語によって事象をどのような構文で表すかは異なる。

中日両言語の対照研究では、日本語の結果副詞が中国語ではどのような構文で表されるかといった局所的な考察が行われてきたが、本論文では、「存在のあり方」について、それぞれの副詞的修飾表現と形容詞的修飾表現とを対比しつつ、考察が進められている。本論文によって、中日両言語の副詞的修飾の枠組みの違いについて全容を明らかにするための重要かつ確かな端緒が得られたと言える。

また、こうした分析から、日本語の副詞的修飾表現に、「存在のあり方」という新たな枠組みを設ける必要があるという提唱がなされた。この「存在のあり方」は、頻度や習慣などの副詞的修飾成分を「時間的存在相修飾成分」と見なす先行研究に倣えば、「空間的存在相修飾成分」といった位置づけもできる可能性がある。本論文でも、「存在のあり方」の副詞的修飾成分と、時間的存在相修飾成分や格やデ格など場所を表す格成分、「沖に遠くかすむ舟影」のような副詞的修飾成分などとの比較が部分的になされているが、これを理論的に追究することは、日本語の副詞的修飾表現と空間表現との関わりへの解明にもつながる。

もう一つの「日本語における漢語副詞受容の方面」については、扱う語に限られていることから、漢語副詞の受容の実態を部分的に解明したにとどまるが、本研究で扱った語は、たまたまこの語が興味深い振る舞いをしたというものではなく、「状態」「存在のあり方」「数量・程度」という動態・静態双方に関わる表現に注目して、それが副詞的修飾表現と形容詞的修飾表現のどちらで表されるかという理論的な計画があって選定されたものである。本論文の調査でも、どの語も興味深い変遷を示しており、漢語受容のパターンを描き出すことに成功している。

ただし、本論文は、理論的な一般化には至っていない。副詞的修飾表現の分析についても、構文的理論に基づいた分析は部分的であり、漢語受容に関しても、本論文で観察された以外のパターンが存在することも予想される。ただし、これは学界自体がそこに至っていないということであり、本論文の価値を何らおとしめるものではない。むしろ、本論文が示した「重要で確かな端緒」によって、この分野の研究が大きく切り拓かれたのである。

2 最終試験

令和4年1月24日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。